資料館ノート　第46号　　平成15年7月16日発行

長屋のくらしと道具　②

はきものとかぶりもの

江東区深川江戸資料館

『絵本江戸爵』（天明6年　1786）
十一月の浅草・酉の市のようす。頭にはさまざまな形の手ぬぐいや頭巾をかぶった男女が描かれています。足元はほとんど草履が多いようです。後方には浅草田圃が広がっています。手前は山谷堀でしょうか。屋形船が三艘浮かんでいます。

江戸庶民のくらしに使われる道具について、今回ははきものと頭にかぶるもの、「頭と足元」で使う道具です。

かぶりもの

江戸の町は今と違って舗装されていません。ずいぶんと土ぼこりが立ったようで、髪に付ける油も粘りがあるため、汚れが付きやすかったようです。そこで帽子・頭巾・笠・手ぬぐいといったかぶりものが必要でした。

江戸時代の帽子といえば、綿帽子など主に女性の被り物をさしました。これは真綿を薄く延ばして頭にのせるもので、防寒のためです。元禄の頃（1688～1704）寺社参詣や花見がさかんになると、ほこりをよけるために流行しました。これが現在の花嫁衣裳に見られる綿帽子ですが、縮緬で作られるようになったのは後世のことです。

頭巾は江戸以前からありました。「勧進帳」の弁慶のような山伏が頭に載せているのも、この頭巾と同じルーツです。江戸時代になると男性は月代を剃るようになったので、頭を保護する必要が生じたこと、合わせて防寒や覆面といったことからもさまざまな形の頭巾が考案されました。しかし庶民が頭巾をかぶることはあまりなかったようです。むしろ使われていたのは笠でした。笠は古代からの雨具であり、頭を飾るための道具でもありました。江戸では円錐状の菅笠が男女ともに使われていました。菅笠が生まれる前は小さな薄い板から作られた笠に漆で塗り固めた塗り笠がよく使われたようですが、作りやすい菅笠に代わり、さらにその材質から檜笠・葛笠、作り方から網代笠・網笠、使用する人によって虚無僧笠、鳥追い笠（三味線を弾きながら門付けして歩く芸人、鳥追いがかぶった）などの種類ができました。

しかし、かぶるということで最も庶民が使った道具は手ぬぐいではないでしょうか。頬被りやねじり鉢巻などその用途は多彩です。顔や手を拭いたり・洗ったり、ケガの際の包帯にしたり、品物をと包んだりと便利な手ぬぐいは外出の際の必需品でした。

足半ぞうり

はきもの

江戸庶民が日常はくものといえば、草履・草鞋・下駄ということになります。草履と草鞋はワラ製品、下駄は木製品。幕末の随筆『守貞漫稿』(喜多川守貞著)によればワラ草履のことを「金剛」といいました。「金剛」とはダイヤモンドのことですが、そこから丈夫で堅固なものをさすようになったといわれます。「丈夫で破れない草履」といった意味合いなのでしょう。

足半草履は、掘割や池など湿ったところで仕事をする人がはきました。もとは室町時代の武将がこれを使っていたようで、戦場を足半をつっかけて走る姿は、絵巻物にも見受けられます。

ワラは濡れると滑りやすくなり、また途中でめくれたりして危ないことから、敏捷に働けるようにとつま先とかかとが地面に付くように作られています。足の半分くらいの大きさしかないことから、「足の半ば」で足半草履となりました。船頭や筏師といった人たちが特に使っていました。展示室の町並みでも船頭松次郎と木場の木挽き職人の大吉の家には、この足半が見られます。

草履と同じ仲間に雪駄があります。雪駄は雪踏とも書きます。『守貞漫稿』では雪踏は千利休が初めて作ったという説を紹介していますが、雪のしめりが沁みこんでくるのを防ぐために、草履に草履を重ねて厚くするようになり、これを裡付草履というようになったそうで、さらに地面からの水気を防ぐために、裏に牛革を貼ったものを雪駄と呼ぶようになったようです。

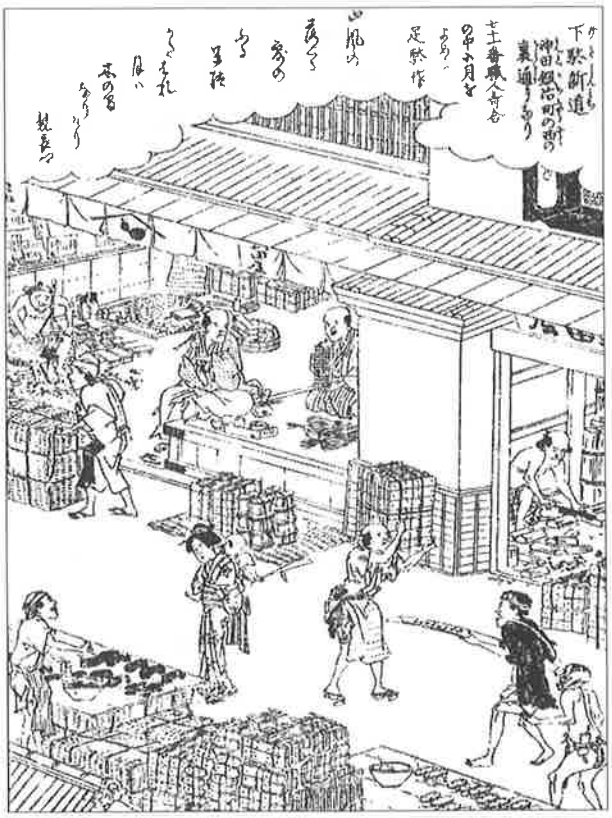
草鞋はわらを編んで、足にくくりつけるための縄がついているものです。本体には縄を通す穴が付いていて、これを乳といいます。草鞋は長時間歩いたりする場合、特に旅行の際に使われました。また江戸市中を天秤棒などで荷物を担いで売り歩く行商、棒手振商人たちもおおいに使いました。旅行などで長時間はいていると、どうしても擦り切れてしまうので、道中でもよく買い換えたようです。

草履も草鞋もワラが材料ですが、江戸の中心、日本橋あたりから3、40分歩けば田畑が拓けていた当時にあっては、容易に入手できる材料であり、たくさんの人が編むことができました。しかし、実際に編むとなれば手間や時間がかかります。そこで、草鞋は町の木戸を管理する木戸番小屋の番人が売ったりしていました。

では下駄はどうでしょうか。江戸市中にはたくさんの下駄屋・下駄職人がいました。台は桐材、歯はケヤキ製でしたが、杉も使われるようになりました。宝永年中(1704～11)京都では上部が草履で、下に下駄の歯がついているといったものも考案され、女性が主にはいていました。

神田鍛冶町2丁目(現千代田区鍛冶町2丁目)の裏通りには、下駄製造の職人が多かったことから、下駄新道という名の通りがありました。

また現在の人形町からほど近い現中央区小舟町には照降町という俗称がありました。周辺は日本橋魚河岸や廻船問屋などが立ち並ぶ賑やかなところですが、ちょうどこのあたりに傘・雪駄・下駄を売る商店が並んでいたため、雨・雪・晴の日に使うものを売っていたことからこう呼ばれるようになりました。



『江戸名所図会・下駄新道』(天保7年　1836)
職人の町・神田の下駄屋さん。